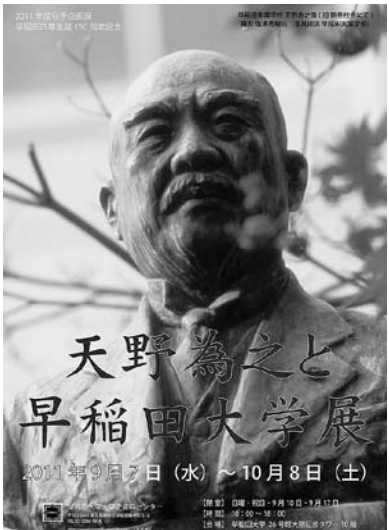
二〇一一年度秋季企画展「早稲田四尊生誕一五〇周年記念　天野為之と早稲田大学展」

木下恵太



早稲田大学の建学の祖である大隈重信・小野梓を助け、大学の礎を築いた「早稲田四尊」――高田早苗・坪内逍遙・市島謙吉・天野為之――は二〇一〇年から二〇一一年にかけ、生誕一五〇周年を迎えた。すでに二〇〇九年春には、坪内逍遙生誕一五〇周年記念展（美濃加茂市・早稲田大学共催）、二〇一〇年春に「市島春城展」（早稲田大学図書館主催）、秋に「高田早苗展」（大学史資料センター主催）が開催されている。本展示会はこれらに引き続き、天野為之の生誕一五〇周年を記念して開催されたものである。展示会の期間は二〇一一年九月七日から一〇月八日まで、参観者の総数は六九四名であった。

なお、ポスターの写真につき、塩澤秀樹氏・早稲田実業学校、展示資料写真につき、平田幸雄氏・唐津市のご協力をいただいた。あらためて各位のご厚意に感謝申し上げる次第である。

一　誕生から東京専門学校時代まで

天野為之は万延元年一二月二七日（一八六一年二月六日）、唐津藩藩医の子として江戸藩邸に生まれた。一家で唐津に帰住すると、唐津藩の英学校耐恒寮で学び、後に財政家として活躍する高橋是清の教えを受けた。高橋は一切を英語で教えたが、天野は上達が早く、高橋はその発音の正しさを常に称賛していたという。一五歳になると高橋の勧めもあり、天野は上京し、東京外国語学校、ついで東京開成学校（在学中東京大学に改編）に入学した。

ここで天野の同窓生となったのが高田早苗、坪内雄蔵（逍遙）、市島謙吉等であった。高田の主唱により、天野も仲間たちと小野梓の鷗渡会に参加し、一八八二（明治一五）年一〇月に創設された東京専門学校（現早稲田大学）の講師に就任した。

天野は高田と共に東京専門学校の代表的講師として活躍し、天野の担当する経済学は高田の政治憲法学と「政治科の双璧」と称されるに至った。また、学校での講義をもとに一八八六（明治一九）年に天野が発刊した『経済原論』は大成功を収め、出版した一年ですでに四版を数え、一九〇三（明治三六）年には第二五版に達した。これにより、天野の名は一躍日本有数の経済学者として知られるようになった。

［展示資料（写真パネルを除く）］

○天野為之肖像画　岸畑久吉画　一九一六（大正五）年作　會津八一記念博物館所蔵

○「早稲田大学風景」岸畑久吉画　會津八一記念博物館所蔵

草創期の学校周辺は、一面に蛙の鳴き声が聞こえる水田地帯であった。あまりに交通が不便であったため、一八八五（明治一八）年には「学校移転論」が提起されたが、天野は「辺鄙なことは始めから知れ切ったことだ、之を不便とする講師諸君はお罷めになるがよい」と述べ、これに反対した。

○天野為之自筆履歴書　大学史資料センター所蔵（大学文書5－3－53）

現在、天野の自筆による文書はわずかしか残されていないが、本履歴書はその一つである。生年が安政六年（一八五九―一八六〇年）となっているが、これは天野が第一回総選挙に立候補する際、三〇歳以上である必要があったためで、実際は万延元年（一八六〇―一八六一年）の生まれである。

○浅川栄次郎・西田長寿『天野為之』（一九五〇年刊）　大学史資料センター所蔵

天野の唯一の伝記である。「序文」には本書成立の事情が記されているが、天野家は関東大震災によりすべてを焼失したため、資料収集がきわめて困難であった、とある。

○「東京専門学校第一回年報」　一八八三（明治一六）年　図書館所蔵（ト10　２３６６）
早稲田大学の前身、東京専門学校における最初の年度報告書である。早稲田の教員として天野が行った、最初の授業の概要を知ることができる。

○「明治十六年　日記　自九月」　一八八三―一八八四年　図書館所蔵（ト10　１７１７）
東京専門学校寄宿舎の日誌。創設直後の学校の様子を伝える。

○「月給判取帳」　一八八二―一八八四年　図書館所蔵（ト10　１７０３）
天野の教え子三浦銕太郎によれば、天野は東大卒業の際、加藤弘之（東大綜理）の推薦により百円の俸給で政府に招かれたが、天野はこれを一蹴したという。

○『経済原論』（初版）　一八八六（明治一九）年三月　図書館所蔵（ヨ２　４９１９）
『経済原論』は経済学者としての天野の名声を一躍高めた代表作である。本書の内容は東京専門学校の理念「学問の独立」と軌を一にしており、欧米の難解な輸入専門書が日本語で咀嚼され、体系化されている。

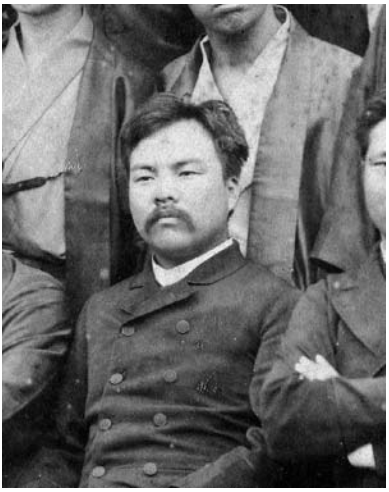
○「東京専門学校壁書」写　原本一八九〇（明治二三）年五月、一九一四（大正三）年書写　図書館所蔵（ト10　１１９１）
東京専門学校の学生による落書きを書き留めたもの。学生が天野をどのようにみていたかが分かり、興味深い。

○天野為之書簡大隈重信宛　一八九五（明治二八）年四月九日　図書館所蔵（イ14　b0401）

東京専門学校の卒業生柏原文太郎が大隈重信との面会を希望したため、天野が大隈に対して書いた紹介状である。柏原は後に東亜同文会の幹事となり、四期衆議院議員を務めた。

○『中央学術雑誌』第一号　一八八五（明治一八）年三月　図書館所蔵

『中央学術雑誌』は一八八五（明治一八）年三月に創刊された学術誌で、現在の早稲田大学校友誌『早稲田学報』の前身である。記念すべき第一号の巻頭を飾ったのは天野の論文であった。



壮年期の天野為之

○天野多喜子書簡大隈綾子宛　一九〇一（明治三四）年一二月二五日　大学史資料センター所蔵　大隈信幸氏寄贈（4ロ23）

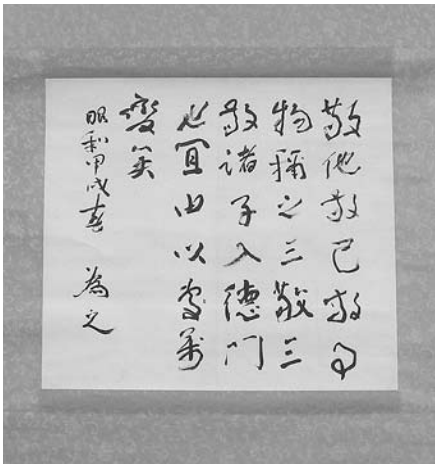
天野為之夫人天野多喜子が大隈重信夫人大隈綾子に送った書簡。内容は大隈重信次女光子の縁談に松浦常（大隈信常、旧平戸藩主松浦詮五男）を紹介したものである。

二　天野為之・多喜子の書画

［展示資料（写真パネルを除く）］

○天野為之書「務実去華」　一九一一（明治四四）年　大学史資料センター所蔵　佐藤康彦氏寄贈

「務実去華」（実に務めて華を去る）について、天野は「きわめて質素に、着実に、そうして華美の虚栄の事をしないようにしてもらいたい趣旨である」と、自らが校長を務めていた早稲田実業学校の生徒に説明している。現在の早稲田実業学校の校是となっている「去華就実」もこれと同じ意味である。



天野為之書「三敬主義」

○天野為之書「処万変主一敬」　一九一四（大正三）年　大学史資料センター所蔵　調布市寄贈

天野は「万変に処して一敬を主とする」と読んでいる。この銘辞についても、早稲田実業学校での天野の訓話が残されている。

○天野為之書「敬他敬己敬事物称之三敬三敬諸子入徳門也宜由以処万変矣」　一九三四（昭和九）年　大学史資料センター所蔵　調布市寄贈

「他を敬し、己を敬し、事物を敬す。之を「三敬」と称す。「三敬」

は諸子入徳の門なり。宜しく由って以って万変に処すべし。昭和甲戌春」

○天野多喜子画「多摩川」　大学史資料センター所蔵　調布市寄贈

私生活においては天野は「仲々の六かしや」であったが、よく夫人を敬愛し、家庭内はたいへん円満であったという。夫人の絵には夫為之自作の詩が書きつけられている。

三　早稲田実業学校・早稲田大学大学部商科の創設に参加

東京専門学校は高田早苗等の努力により急速な発展を遂げ、一九〇二（明治三五）年創立二〇周年を機に早稲田大学と改称した。天野も大学開校の募金運動に従事しこれに協力したが、天野が念願としていたのは高等普通教育からの商業教育の独立であった。

一九〇四（明治三七）年、日清戦後の飛躍的な商工業の発展を背景として、大学部商科（現在の商学部）がようやく発足し、天野はその初代科長に就任した（在任～一九一一年）。商科は理論に偏らない実務教育の理念のもと、天野を中心として大きく成長し、明治末年には大学卒業生のうち六割から七割を商科生が占めるに至った。

一方、天野は中等教育においても独立した実業教育を行う学校の必要を感じ、天野を中心として、一九〇一（明治三四）年早稲田実業中学（後に早稲田実業学校と改称）が設立された。その翌年、天野は初代校長大隈英麿の後を受けて、第二代校長に就任した。この後、天野は学校の組織整備や鶴巻町校舎の新築など、早稲田実業学校と三十年以上にわたりその苦楽を共にすることとなった。

［展示資料（写真パネルを除く）］

○『早稲田実業学校設立の趣旨及規則概要』　一九〇七（明治四〇）年　図書館所蔵（ト6　1285）

一九〇七年四月、早稲田鶴巻町に早稲田実業学校の新校舎が落成し、学校は大学部商科との共用校舎から移転した。

○大学部商科学科配当表　一九〇四（明治三七）年　大学史資料センター所蔵（大学文書5－26－12）

大学部商科における最初の年度の学科配当表である。

二代目の大学部商科校舎（左側）

○「春城日誌　明治四十年一月以降」　一九〇七（明治四〇）年一月―六月　図書館所蔵（イ4　1919－546）

一九〇七年四月、早稲田大学では鳩山校長に代わり大隈重信が初代総長に、学監の高田早苗が初代学長に就任し、高田が引き続き大学経営の中心を担うこととなった。しかし、「春城日誌」の本条によれば、本来は天野が新校長に就任する予定であった。

○天野為之試験問題　大学部政治経済学科一年「経済」　一九一〇（明治四三）年頃　大学史資料センター所蔵　堤清二氏寄贈（堤康次郎関係文書書類の部6173）

堤康次郎が受けた天野「経済」の試験問題である。次ページは欠落している。なお、堤康次郎は一九一三（大正二）年に早稲田大学を卒業した後、衆議院議員となり、戦後は衆議院議長を務めた。さまざまな企業経営を手掛け、現在は西武グループの創設者としても広く知られている。

○天野為之書簡増田義一宛　（　）年十一月六日　大学史資料センター所蔵　増田義和氏寄贈（増田義一関係文書3－7－2－1）

商科卒業生児玉智吉の渡米につき、『実業之日本』社社長増田義一に便宜を依頼した書簡である。

四　天野の経済評論活動

天野は『経済原論』、同年刊行の『商政標準』、一九〇二（明治三五）年の『経済学綱要』、また西欧の経済学専門書の翻訳等、自由主義を支持する立場から経済学・経済政策学の研究発表を続けた。しかし、天野の関心は理論研究だけにとどまるものではなかった。

一八九七（明治三〇）年、雑誌『東洋経済新報』の経営委譲の話が天野のもとに持ち込まれた。当初は辞退していた天野であったが、一旦これを引き受けると縦横に経済評論の筆を振るうようになった。当時の天野が取り上げた代表的なテーマとしては、金本位制導入論、取引所改革論、勤倹貯蓄論、保護貿易反対論、地租増徴反対論、労資協調論等が挙げられるが、田口卯吉の『東京経済雑誌』等と論戦を展開し、一躍『東洋経済新報』を日本の代表的な自由主義経済誌へと発展させていった。

しかし、天野は東洋経済新報社において有望な若手たちを育成すると、一九〇七（明治四〇）年にあっさり彼らに会社を譲った。「私はこの社に別段の功労はない。ありとすれば、早く社を去って若い人に譲ったことである」というのが、後年の天野の弁であった。

天野が創刊した『日本理財雑誌』

［展示資料］

○『日本理財雑誌』　一八八九（明治二二）年　大学史資料センター所蔵

『経済原論』の印税二〇〇円を資本として、一八八九年二月に天野が創刊した雑誌である。同年に高田が発刊した『憲法雑誌』と対をなしていたが、翌年早々には廃刊となった。

○「償金は取り得可き乎」『東洋経済新報』一九〇五（明治三八）年七月一五日号　図書館所蔵

日露戦争の講和が成立する二か月前、世上では巨額な賠償金の獲得が取り沙汰されていた。しかし、天野は冷徹な分析により、ロシアから賠償金が得られる見込みはほとんどない、と結論づけた。

五　早稲田大学第二代学長に就任

一九一五（大正四）年八月、大学初代学長の高田は学長を辞し、第二次大隈内閣の文部大臣に就任した。これに代わり、理事の天野が早稲田実業学校校長を辞し、第二代学長に就任した。同時に、理事三名が選任されて業務分担制が敷かれ、学長が理事の合議・決定を遂行する新体制となった。

学長としての天野の最大の任務は、就任前に決定を見た「御大典記念事業」（大正天皇即位式を記念した大学拡張事業）の実行であった。市島謙吉が募金の委員長となり事業計画は順調に進行したが、一方で「デモクラチック・ベーシス」の旗印のもと、一部の若手教員たちが大学の意思決定への参加を求めるようになっていた。彼らはプロテスタンツと自称し、教授会の権限を拡大した大学改革案を作成し、大隈綾子夫人銅像設置問題、予科二年制印刷問題、浮田和民教授失言問題等をとらえ、厳しく天野学長を攻撃した。さらには大学改革の実現のため、大隈内閣総辞職後に憲政会の役員となっていた高田に学長復帰を要請した。

天野は学長の辞意を高田に告げ、プロテスタンツ修正案を受け入れた高田は学長復帰を表明した。

［展示資料（写真パネルを除く）］

○「早実財団法人認可申請書」　一九一六（大正五）年一〇月一七日　大学史資料センター所蔵　大隈信幸氏寄贈（17ハ15）

天野は早稲田大学学長に就任した際、一九一五（大正四）年八月早稲田実業学校の校長を辞し、同校名誉校長と

なった。しかし、本文書からは天野が依然としてその運営に心を砕いていた様子がうかがえる。

○「早稲田大学講義録一覧」　一九一六（大正五）年九月　大学史資料センター所蔵

早稲田大学の名声に大きく寄与したのが各種「講義録」による、独自の通信教育制度であった。経済的理由などで正規入学できなかった全国の青少年に勉学の機会を与え、受講修了生はこの年までに、およそ一〇〇万人に達していたという。

○「御即位大典紀念事業資金寄附者名簿」　大学史資料センター所蔵（三号館旧蔵資料50－16）

「御大典記念事業」は大学の第一期計画（一九〇一年～）、第二期計画（一九〇八年～）に続く、三度目の募金による拡張計画である。各学科・学年に委員を設け、初めて学生にも募金を担当させた。

○天野為之書簡市島謙吉宛　一九一六（大正五）年五月五日　図書館所蔵（チ06　03813　0001－0042）

大学への寄付金を管理・監察する基金管理委員会の日程に関する書簡である。渋沢栄一は第二期計画の発足以来、基金管理委員長を務めていた。

六　早稲田大学を去る

一九一七（大正六）年六月一九日、高田の学長復帰を批判した校友会有志名義の印刷物が都下の新聞社に配布され、

いわゆる「早稲田騒動」が始まった。この後、大学は三か月にわたり紛糾・混乱を続けたが、紛争の本質について、伝記『天野為之』は次のように指摘している。

「学長として再び経営の才に富める高田博士を起用すべしとの説と、均しく学園の功労者である天野博士を前学長の残存期間だけ学長たらしめ、直ちに離任させる如きは情に於て許さざるところである。少くとも今一期は学長の地位にあらしむべきであるとの説との争いであつた。」

しかし、紛争の背景としては、東京専門学校以来の「家族的」な学校運営から、大きな大学組織にふさわしい「立憲的」な学校運営への転換の問題が横たわっていた。天野の校規改正案における、終身維持員制度の廃止・維持員の大幅増員・学長による理事の指名制といった内容は、このような流れに沿った主張であった。

紛争が多くの校友を巻き込みいよいよ拡大すると、高田・市島・坪内を始めとした多くの維持員が辞任を表明した。これを憂えた大隈総長は天野にも学長の辞表を求めたが、天野はこれを謝絶した。

結局、さまざまな調停もすべて失敗に終わり、天野は学長を任期通りに退任した。天野は大学の維持員・講師も辞任し、これにより大学との関係は一切断たれることとなった。

［展示資料（写真パネルを除く）］

○パンフレット『早大学長問題顚末書』・『学長問題経過概要』・『学長問題経過概要の妄を駁す』　一九一七（大正六）年　大学史資料センター所蔵・図書館所蔵（ト10　2052、ト10　2046）

『学長問題経過概要』は高田の立場を支持するパンフレット、『早大学長問題顚末書』・『学長問題経過概要の妄を駁す』は天野の立場を支持するパンフレットである。

○ビラ「正義の為に起つ者は誰ぞ」一九一七（大正六）年　図書館所蔵（ト10　２０５２）

三人の理事、天野を除く維持員をはじめ、大半の大学教職員は高田の立場を支持した。しかし、各界で活躍する校友、また学生においては天野の立場を支持する声が多かった。

○「高田博士直話筆記」図書館所蔵（ト10　２０６７）

当事者である高田の視点から、天野および「天野派」の動向が述べられている。紛争直後の記録であったと考えられ、生々しい語調の記事が続いている。

○市島謙吉口述「校紛録」図書館所蔵（ト10　２００６）

「早稲田四尊」の一人に数えられる市島は、高田の盟友として終始その大学経営を補佐した。この「校紛録」においても、大学の拡張・改革について適任なのは高田であり、「保守・収縮」志向の天野は不適格であるとの考えで貫かれている。

○坪内逍遙「自分の見たる我校の紛擾顚末」（「早稲田大学紛擾秘史」第六冊）図書館所蔵（ト10　１７７２－６）

「四尊」のもう一人坪内も高田の立場を支持したが、この記録においては冷静・客観的に事態の推移を叙述している。「〔大学の〕参謀本部の中枢は過去三十余年間主として高田君であつた。過去に於てはそれが早稲田大学の利益でもあり特色でもあり権威でもあったが、それがまた其大蹉跌（つまずき）の一宿因であつた」とも述べている。

○天野為之辞表　一九一七（大正六）年一〇月九日　早稲田大学所蔵

天野は大学を辞した後、紛争の原因や自身の立場については沈黙を守った。しかし、「自分のあのときの立場は、西南戦争における西郷のようなものだ」と一言、親近者に漏らしたという。

○石橋湛山「大正六年の早稲田騒動」『東洋経済新報』一九五〇（昭和二五）年一〇月一四日号　図書館所蔵

「天野派」の中心人物の一人であった石橋湛山による回想である。石橋は当時の自らの心境に触れ、天野個人のためではなく、母校の改善とその民主化のために戦ったと、述懐している。

七　早稲田実業学校校長に復帰

天野が大学を去ると、期せずして関係修復を仲立ちする運動が次々と起こった。しかし、大学に復帰した高田・坪内・市島に対し、天野が大学に足を踏み入れることはもはやなかった。ある人が天野の大学における「光輝ある歴史」を説いたところ、天野は身じろぎもせず「過去は他人だよ」と答えただけであった。

天野は大学を去った翌年、早稲田実業学校の校長に復帰した。以後、死の床につくまで天野はここで経済学や英語の授業を担当し、ある時は生徒たちのためレコードに英語の発音を吹き込んだ。「薫陶三十余年の化、自ら育英始終を成すを信ず」と詠んだ通り、早稲田実業学校における三十余年の教育が晩年の天野の誇りであった。

一九三八（昭和一三）年三月二六日、天野は校長に在任したまま、七七歳で亡くなった。葬儀はその三日後、多くの校友・生徒たちが見守る中、学校葬として行われた。

奇しくもこの年には、大学復帰後に総長となり、大隈講堂を建設した高田も七八歳で亡くなっている。

その二三年後の一九六一（昭和三六）年十一月、早稲田大学では天野の功績を再評価し、「天野為之先生生誕百年記念祭」を開催した。

［展示資料（写真パネルを除く）］

○七言絶句詩軸「功名空在鏡中憐～」　一九二五（大正一四）年　図書館所蔵（チ6　4012）

「功名空しく鏡中に在りて憐れむ　白髪蕭騒歳月遷る　剰（あま）し得たり講壇三寸の舌　枉（ま）げて心力を殫（つく）して青年に教ゆ」

（語釈）過ぎし日を顧みれば、私は功成り名遂げることができなかった。鏡をのぞき込むに、いつの間にか歳月は過ぎ、わびしい白髪の姿となっている。しかしながら、私には立つべき教壇があり、三寸の舌が残されている。私は心身の気力をふりしぼり、若い生徒たちに授業を教え授けるのである。

○七言絶句詩軸「休道先生韜晦深～」　一九二七（昭和二）年　図書館所蔵（チ6　4246）

「道（い）うを休めよ先生韜晦（とうかい）深しと　才疎豈に蒼黔（そうけん）を救うを得ん　徒を集め学を講ず何事をか為さん　誰か識らん花を養い樹を養うの心」

（語釈）「先生はわざと卑下し、隠れているのです」などと、もう言わないでもらいたい。私は不才の者であり、要路に立ったとしても人びとを救えようか。「学校に生徒を集め授業して、どうしようというつもりか」とのお尋ねだが、いったい誰に分かるだろうか。花を育て苗木を育てるにも似た、私のこの心持ちを。

展示会場（125記念室）

○早稲田実業学校　第二六回記念写真帖　一九二八（昭和三）年　大学史資料センター所蔵

アルバム冒頭には天野の肖像写真、揮毫、早稲田実業学校校歌が掲載されている。なお、校歌（第一番）の一節に「去華就実の校風」とあるが、これは「三敬主義」とともに天野が強調してきた学校のモットーであった。

○天野為之葬儀写真　一九三八（昭和一三）年三月　大学史資料センター所蔵

調布市寄贈

葬儀は早稲田実業学校の校庭にて行われた。

○『大成』第三二号　天野先生追悼記念号　一九三八（昭和一三）年七月　図書館所蔵

早稲田実業学校の生徒たちによる追悼文を多く収録している。天野は生徒たちより「校長先生」と呼ばれ、敬愛の念を集めていた。